

令和元年6月17日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16804

研究課題名(和文) 日本学者レオン・ド・ロニーのネットワークの研究 未公開資料を活用して

研究課題名(英文) Research on the network of Japan scholar Leon de Rosny - using unpublished documents

研究代表者

Belouad Chris (BELOUAD, Chris)

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20725139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：この3年間で、フランスにおける日本学の草分けレオン・ド・ロニーに関する研究を大いに進めることができた。まず、博士論文で十分に取り上げられなかった課題「ロニーによる仏教の受容」について研究を進め、研究公開も行った。加えて、ロニーの曾孫の協力を得て、フランスで未公開資料を発見した。この発見によって、今後のロニー研究の基盤を作ることができた。発見に伴う共同研究は、2020年-2021年に公開する予定で現在執筆中であるが、一部については2019年中に公開する。最後に、本研究の枠内において、国際共同研究や海外での研究公開を行い、ロニー研究における国内外の共同研究体制を強化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未公開資料の調査およびロニーの曾孫との鼎談は、報告者がロニーの曾孫と築き上げてきた信頼関係に基づくものであり、現在のところは報告者しかできない研究である。日本近代の文化交流史を解明することは、このグローバル化の時代において有意義である。ロニーの活動を通して19世紀末フランスにおける日本学の形成と日本文化の受容を明確することは、文化交流が加速する現代にも一脈通じるアクチュアリティをもつであろう。

研究成果の概要(英文)：During the last three years, I could carry on my research about Leon de Rosny (1837-1914), the pioneer in the fields of research and education about Japanese language and culture in France. First, I could advance my research and publish some results on the topic of the reception of Buddhism by Rosny, which is a topic I started to investigate in my PhD thesis (2012). In addition, thanks to the cooperation of the great-grandchildren of Rosny, I could discover unpublished documents in France; which allowed me to lay the ground for my future research on Rosny. A part of this research will be published in 2019, but I am still in the process of writing others parts, which I plan to publish in 2020 and 2021. Finally, as part of this project, I engaged in international collaborative research, and I could consolidate my research network for Rosny-related projects in Japan as well as abroad.

研究分野：日仏文化交流史

キーワード：日仏文化交流 幕末・明治 フランス フランスにおける日本学 レオン・ト・ロニー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ロニーの活動について

本研究はフランスにおける日本語教育・日本研究の草分けレオン・ド・ロニー (Léon de Rosny, 1837-1914) に関するものである。ロニーは少年時代、東洋学者のスタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien, 1797-1873) に中国の言語と文化を学び、ジュリアンの勧めによりほぼ独学で日本語を学び始める。ロニーはフランス外務省の依頼で、日本人をはじめ、パリを訪問した漢字文化圏の使節の通訳・案内役を何度も務めている。1862年に文久遣欧使節団の一員としてパリを訪問した福沢諭吉 (1835-1901) と友好関係を築き、日本語や日本文化について多くの情報を得る。文久遣欧使節団の通訳として業績を挙げたロニーは、1868年に東洋語学校 (Ecole des langues orientales) に開設された日本語講座の初代教授となった。1880年代までは日本語の教科書や日本文化論を数多く執筆する。1873年には、国際東洋学者学会 (Congres international des Orientalistes) を立ち上げ、その第一回目をパリで主催し、専門分野としての日本学の制度化にも貢献した。しかし、それ以降は日本学から次第に離れ、宗教文化についての研究に取り組むようになり、晩年は特に仏教に関心を寄せた。遺言により、師のジュリアンから受け継いだ中国関連の書籍と、自分が集めた日本関連の書籍は、地元のリール市に寄贈された。なお、寄贈の条件として、他の図書館や教育機関への貸し出しなどを禁じている。

(2) ロニー研究に関する国外・国内の研究動向

ロニーは没後、とりわけ20世紀前半のフランスの日本学において、あまり評価されなかった。日本語講座の教授としてロニーの後を継いだジョセフ・ドトルメル (Joseph Dautremet, 1860-1946) がロニーを過度に批判していたことが原因の一つである。1970年代、国立東洋言語文化大学 (INALCO) の日本学教授のベルナル・フランク (Bernard Frank, 1926-1996) とルネ・シフェール (René Sieffert, 1923-2004) はドトルメルの過度の批判的立場から離れ、ロニーの活躍と業績をより客観的に紹介するようになったが、学術研究としてロニーの再評価に取り組むまでには至らなかった。これには、「ロニー文庫」に簡単にアクセスできなかったことも影響する。

フランスにおけるロニー研究が進まなかった一方、日本ではロニーが「再発見」され、学術研究の中で紹介された。佐藤文樹 (『上智大学仏語仏文論集』, 第7号, 1972年, pp. 1-15) と松原秀一 (『福沢手帳』, 第2号, 1974年, pp. 1-10 および『慶応塾大学福沢研究センター近代日本研究』第3号, 1986年, pp. 1-56) の研究をはじめ、1970年から日本ではロニーに関するいくつかの研究が行われてきた。

ヨーロッパでは、イギリスの日本学者ピーター・コーニッキー (Peter Kornicki) (ケンブリッジ大学) が1994年に「ロニー文庫」の日本関連書籍の目録を作成し、ヨーロッパにおけるロニー研究の基盤を築いた。その後、学術研究の枠内でロニー活動と研究業績を再評価する動向が見られて、2014年11月、報告者も共著者として参加した書物 *Leon de Rosny: de l'Orient a l'Amerique* (『レオン・ド・ロニー: オリエントからアメリカまで』) が出版された。また、2014-2015年度には、リール市立図書館の「ロニー文庫」を対象としたフランスとベルギーの共同研究プロジェクト「レオン・ド・ロニー文庫-ヨーロッパにおける日本学の源流」も行われた。その研究成果を公開すべく、2015年にリール第三大学は、Genese des etudes japonaises en Europe: autour du fonds Leon de Rosny (「ヨーロッパにおける日本研究の生成: レオン・ド・ロニーの蔵書をめぐって」) 2018年に、La circulation des savoirs entre l'Asie et l'Europe au temps de Leon de Rosny (「レオン・ド・ロニーの時代のアジアとヨーロッパの間での知の循環」) というシンポ

ジムを開催した。報告者のロニー研究はこのように、独自の視点を持ちながらも、フランスにおける「ロニーの再発見」という潮流に乗るものでもある。

2. 研究の目的

本研究の出発は、報告者が2012年に大阪大学に提出した博士論文「フランスの初代日本学者レオン・ド・ロニーの思想系譜と日本観—19世紀後半フランスにおける東洋観の変化を背景に—」である。この論文では、先行研究では見逃されたロニーの活動の様々な側面に焦点を当て、その「全体像」を明らかにした。しかし、資料収集と執筆時間が制限されたため、博士論文においてロニー研究をさらに広げる余地を残した。

本研究の目的は、今までの研究を通して得られたロニーの活動や思想に関する知識を活かして、ロニーの「ネットワーク」という新しい視点から資料調査を行い、資料の分析に基づいた研究公開を行うことである。長期の目的（本研究の終了後）は、本研究で得た情報を加えて博士論文を改稿し、日本語で単著を出版することである。加えて、本研究における資料収集や研究公開を通して、ロニー研究における国内外の共同研究体制を強化することである。

3. 研究の方法

(1) 報告者は2回（2016年と2017年）にわたってフランスに出張し、レオン・ド・ロニーの曾孫である、ベネディクト・ファブル＝ミュラー氏（Benedicte Fabre-Muller）とフィリップ・ロスシュタイン氏（Philippe Rothstein）と面会し、彼らが所有している未公開資料について調査を行った。

(2) 報告者は上記2回の出張の際、論文として編集して公開する目的で、ミュラー氏とロスシュタイン氏と鼎談を行った。

(3) 報告者は上記2回の出張の際、パリ市にあるフランス国立図書館（BNF）で資料調査を行った。ロニーが設立した学会に焦点を当て、以下の資料について調べた。「日本研究学会論集」(Memoires de la Societe des Etudes japonaises)、「国際科学連盟年報」(Annales de l'Alliance scientifique universelle)。加えて、フランス国立図書館（BNF）及びフランス外務省の資料館（Archives diplomatiques du Ministere des Affaires Etrangeres）でも調査を行なった。

(4) 2018年度は日本では明治維新150周年、また日本とフランスでは日仏交流160周年に当たり、パリをはじめフランス各地で「ジャポニスム2018：響きあう魂」という複合型文化芸術イベントが行われた。報告者はこの一連のイベントを利用して、より多くの人にロニー関連の研究成果を公開すべく、フランスの研究誌 *Historiens et Geographes*（『歴史学者と地理学者』）にて日仏文化交流史の特集を計画した。

4. 研究成果

(1) ロニーの曾孫の協力を得て、彼らが私有している未公開資料の調査を行い、ロニーが所有していた浮世絵やジョルジュ・ビゴー（Georges Ferdinand Bigot, 1860-1927）の風刺絵など、日本に関する絵を発見した。本研究では、これらの資料を整理・分析し、研究公開するまでの時間的な余裕はなかったが、今後のロニー研究の土台を築くことができた。今後の研究課題を *Rosny et les images*（「ロニーと絵」）と名づけて、ミュラー氏、ロスシュタイン氏との共同研究として取り組む予定である。

(2) ミュラー氏とロスシュタイン氏との鼎談では、ロニーの曾孫の視点から見た「ロニー再発見」に関する考え、国内外のロニー研究者との連携に関する考えなどについて伺った。また、ロスシュタイン氏（元モンペリエ第三大学准教授）は研究者として「ロニーと翻訳」というテーマに取り組んでおり、この鼎談では研究成果の一部を公開した。この貴重な証言をできるだけ多くの研究者に公開できるように、日本語の論文とフランス語の論文という形で研究公開を行なった（雑誌論文、 ）。

(3) 資料調査の結果として、ロニーの「ネットワーク」というテーマに加えて、博士論文で取り上げたテーマ「ロニーにおける仏教の受容」に関する情報も得ることができた。後者については、口頭発表（学会発表）と書籍の分担執筆（図書）という形で研究公開した。前者の「ネットワーク」に関する資料自体は、今後の研究の土台として活かす予定である。

なお、この研究公開の一部（図書）はフランスのリール第三大学を中心とする国際共同研究 *Genese des etudes japonaises : autour du fonds Leon de Rosny*（『ヨーロッパにおける日本学の源流—レオン・ド・ロニー文庫—』）の枠内で行われた。

(4) フランスの研究誌 *Historiens et Geographes* の 2018 年 11 月号（444 号）にて、*Figures des échanges franco-japonais au XIXe siècle*（「19 世紀における日仏交流の人物」）を責任編集した。報告者の研究論文（雑誌論文、）に加えて、日本人の研究者 4 名に協力を依頼し、福沢諭吉、ジョルジュ・ピゴー、前田正名と 1878 年のパリ万国博覧会、ギュスターヴ・エミール・ボアソナード（Gustave Emile Boissonade de Fontarabie, 1825-1910）をテーマに、日仏交流に貢献した人物を取り上げた。これにより、日仏交流史に関する日本人研究者の研究をフランス語で紹介することもできた。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Belouad Chris, « Réévaluation de Léon de Rosny, précurseur dans plusieurs disciplines des sciences humaines : Entretien avec Bénédicte Fabre-Muller et Philippe Rothstein », 『仏蘭西研究』45 号, 日本仏学史学会, 査読有, 2019 年 6 月, pp. 85-102. (査読有)

Belouad Chris, 「人文学諸学の草分けレオン・ド・ロニーの再評価 —ベネディクト・ファブル=ミュラーとフィリップ・ロスシュタインとの鼎談—」(日本語訳: 寺尾佳子), 『仏蘭西研究』45 号, 日本仏学史学会, 査読有, 2019 年 6 月, pp. 67-84. (査読有)

Belouad Chris, « Léon de Rosny et la constitution d'un savoir français sur le Japon », *Historiens & Géographes n°444 (novembre 2018)*, Association des Professeurs d'Histoire et de Géographie, 2018 年 11 月, pp. 137-141. (査読有)

Belouad Chris, « Introduction : les acteurs des échanges franco-japonais au XIX^e siècle », *Historiens & Géographes n°444 (novembre 2018)*, Association des Professeurs d'Histoire et de Géographie, 査読有, 2018 年 11 月, pp. 135-136 (査読有)

〔学会発表〕(計 1 件)

Belouad Chris, 「レオン・ド・ロニーによる神道と仏教の受容」, 日本仏学史学会, 第 485 回月例研究発表会 (於: 東京都渋谷区, 日仏会館), 2017 年 10 月 21 日

〔図書〕(計 1 件)

Belouad Chris, « La réception du bouddhisme chez Léon de Rosny - De commentateur à acteur : évolution d'une trajectoire », in Beillevaire Patrick, Belouad Chris, Berlinguez-Kono Noriko, Carre Guillaume, Lefevre Brigitte, Rothstein Philippe, Vande Walle Willy, *Genèse des études japonaises en Europe : autour du fonds Léon de Rosny*, Presses universitaires du Septentrion, 2019 年 (予定)

〔 その他 〕

ホームページ等

責任編集をした研究誌の特集 (目次)

<https://www.apfg.fr/DOSSIER-Figures-des-echanges-franco-japonais-au-XIXeme-siecle>

責任編集をした研究誌の特集(目次の PDF 版)

https://www.apfg.fr/spip.php?page=spipdf&spipdf=spipdf_article&id_article=3717&nom_fichier=DOS
SIER-Figures-des-echanges-franco-japonais-au- XIXeme-siecle

フランスの研究雑誌 *Historiens et Geographes* にて特集 *Figures des echanges franco-japonais au XIXe siecle* の責任編集と執筆を行った。

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名 :

ローマ字氏名 :

所属研究機関名 :

部局名 :

職名 :

研究者番号 (8 桁) :

(2)研究協力者

研究協力者氏名 :

ローマ字氏名 :

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。